

十勝毎日新聞

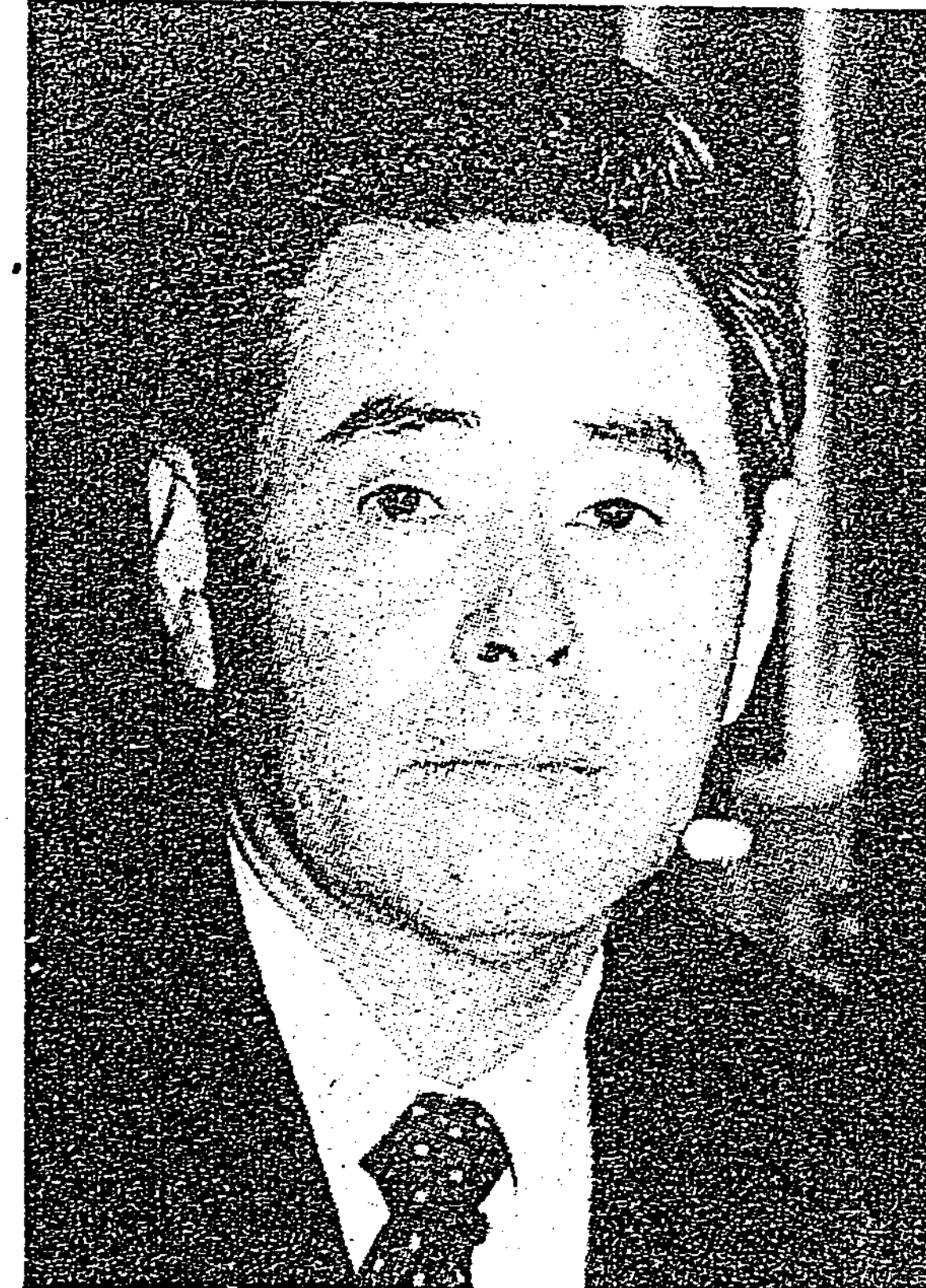
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話=編集②2121、広告
②2323、総務・販売②2222
©十勝毎日新聞社 1987

宇宙誘致への提言

り、一点集中の必要はない。産業集積のある都市は研究開発を分担すべきで、道では空岡、苫小牧地区を想定している。結局、道の宇宙基地構想は十勝と空岡、苫小牧地区が二つの核になっている。この種の大プロジェクトに

一六三年度からの道の新計画に宇宙基地構想が盛り込まれていますが、現在の道としての取り組みは、現在在の種子島の基地では有人宇宙シャトルの打ち上げは年一回が限度で、広大な滑走路、事故への対応など考慮すると、人口密集のない十勝の太平洋沿岸が最適。大樹町には町有地も広く、用地取得も容易に出来ることもあり、道と

北海道副知事
あ び こ
我孫子 健一氏 (56)



して発射場を大樹に想定して、人工衛星の拠点、スペースは推進の組織づくりが必要。シャトル、静止衛星の発射で、民間百十社が参加した宇宙基地の研究会議(座長・松

本正道工科大学長がすでに発足、講演会やシンポジウムを足、講演会やシンポジウムを通じ、構想のPRを進めている。また将来の問題として青少年の関心を深めることも大切で、今年、宇宙少年団の国際ジャンボリーが大樹町で開かれたことは大きな意義があったと思ふ。来年は宇宙開発

また有人シャトルを日本が打ち上げるまで待つという方向と考えている。ただ、現状でどの様な支援体制を取るかは、術者が有人シャトル打ち上げに臨み切ることが先決だと思ふ。

も地域に張りついていくもので、地域の理解がないと成功しない。幸い宇宙基地の面では構想以前から大樹町は十勝地区が一体となって熱心に活動している。これは道としても実に有り難いことだ。私はこれからの北海道の中で、帯広・十勝が最も発展の可能性を秘めていると思つてい

スペースフェア支援

帯広・十勝 可能性秘めた地域

の国際シンポジウムが札幌市海道スペース研究会が発足(北大)で開催されることに月二回の割合で会合を持つてなっており、海外からも百五十人が参加の予定。道の構想し、来年二月までに研究会のこの場を通じて更に説明する報告書をもとめる予定で、具

方向で準備を進めています。が、道としての協力体制は、前述のように宇宙基地構想は道の大きな柱。地元計画が固まれば、道としても積極

略歴 昭和六年札幌市生まれ、北大経済学部卒。二十九

年間キャンペーン 目指せ宇宙基地 第七部